クリスマスの真実

第1稿

井上裕貴

2025/02/25

＜登場人物＞

涼(37)　…主人公

友里(37)…涼の妻

祐樹(8)　…涼と友里の息子

○家の中・リビング（夜）

団地の部屋の一室。
部屋の隅には1メートルほどのクリスマスツリーが置かれている。
テーブルでは涼（37）と友里（37）と祐樹（8）が座り、ケーキを頬張っている。
祐樹は悩んでいる表情。

祐樹「ねえ」
友里「ん？」
祐樹「サンタって、ほんとはいないんでしょ？」
友里、ケーキを食べている手を止める。
友里、不安そうな顔で涼を見るが、涼は動揺を隠すように引き続きケーキを頬張っている。
友里「なんで、そう思ったの？」
祐樹「言われた、まだサンタ信じてるの？って」
友里「友達に？」
祐樹「うん」
涼「でも、まだ決まったわけじゃないだろ？」
祐樹「浩人が見たんだって、浩人のパパが夜にプレゼント置いてるの」
涼「（わざとらしく）へえー」
祐樹「だから今日、確かめようかな」
涼「何を？」
祐樹「2人がサンタかどうか」
涼と友里、ケーキを吹き出す。
祐樹「今日、同じ部屋で寝るから」

○同・寝室（深夜）

祐樹、涼と友里の布団の間に入って寝ている。
祐樹の持ってきた毛布が涼と友里の体にもかかっている。

友里、向かいの涼に合図して、押入れを開けるように示す。
押入れの中には、緑のラッピングに包まれた箱。
涼、そっと毛布から抜け出して、押入れを開けようと手を伸ばす。

祐樹　「何してるの？」
振り返ると、寝ていたはずの祐樹が、涼の方を見ている。
友里、必死に寝ているふり。

涼　「ちょっとパパ、トイレ」

祐樹　「ついてくよ？」

涼　「いや、やっぱり、大丈夫」
涼、渋々布団に戻る。
祐樹、怪訝な顔で涼を見ているが、再び寝る。

×　×　×

早朝。
祐樹、深夜と同じように涼と友里の間に入って寝ている。
涼、はっと目覚め、窓の方を見る。
カーテンの端から日がさしているのを確認する。
涼、そーっと祐樹の毛布から抜け出し、押入れの扉を開ける。
が、中にはプレゼントの箱がない。
涼、不審な顔をする。

○同・リビング（朝）

涼、リビングへの扉を開けると、クリスマスツリーの下にプレゼントが置かれていることに気づく。
緑色のラッピングをしたプレゼント箱。

×　×　×

祐樹、ラッピングされた箱を開けて。

祐樹　「おお！やった！」

涼と友里、テーブルから祐樹の様子を見ながら、朝食を食べて小声で会話している。

涼　「ありがとね」

友里　「何が？」

涼　「プレゼント、ツリーに置いてくれたの」

友里　「ん？いや、違うけど。あなたじゃないの？」

涼　「え？俺じゃない」

まさか、という顔で見合わせる2人。

祐樹、2人に向かって

祐樹　「来年は遅くまで起きて、確かめてやります」

涼、立ち上がって。

涼　「よし、パパもそうする！」

祐樹　「（笑って）何それ」

笑う3人。

空にはしんしんと雪が降っている。

その空にかかった雲の奥に、ソリに乗る人影が一瞬映って消える。

（終）